

千魚の眼

—魚へん歳時記—

その1

[ゴマメ 鱒 小万米]

中島 満(フリーライター)



図：1

「ゴマメ」は、お正月のおせち料理には欠かせない品ですが、お重の中では地味な存在です。小さいながらも尾頭付きで、マメ（健全）に1年過ごせるようにという願いをこめた語呂合わせになっています。

「田作」とも書き、たくさん獲れる小鯛、あるいはカタクチイワシを干したり、魚油の絞り粕を干鯛（ほしか）として、稲作の肥料に利用したことからタヅクリと呼びます。豊穰の象徴として縁起のよい祝儀食とされ、小万米（ゴマメ）の文字をあてました。

ゴマメ売りの「追従」

もうひとつ、辞書にはコトノバラとあります。漢字は、「小殿原」つまり、小さな殿バラで、カズノコとおなじように、子沢山をイメージさせました。

ごまめ＝田作りと呼んで、祝い魚として正月膳にのせる食習慣が定着したのは、室町末から江戸時代初めごろのようで、川上行蔵著『完本日本料理事物起源』（岩波書店）によれば、「包丁聞書」（1560～80年頃成立）までさかのぼれ

るそうです。

江戸川柳に「ごまめ売り猫に一ひきついしやうし」（「絵本柳樽」図1）とあるように、「ごまめごまめ」の呼び声で江戸市中を売り回る商売がありました。「ついしやう」は「追従」で、長屋の猫にごまめを1匹差し出して「おべっかをつかい」長屋の住人たちに買ってもらおうという「ごまめ売り」がユーモラスに描かれています。

この商売は、柳田国男が紹介する奇談「猫がものを言う」話として『動物界靈異誌』（1927年）に載せています。

「信州飯田のある町に〈ごまめくれ〜〉と話す猫がいる」という書き出しで、「おもてをゴマメ売りがゴマメゴマメと呼びながら通った。そのあとで、障子の外に、誰だか小さな声でゴマメ、ゴマメというものがおる。人の影はなくて、縁側に家の猫がいるだけであった。いつもゴマメ売りが来て買うときに、一尾か二尾くれることになっているので、ほしさのあまりこんな声を出したのであろうか。」と書いています（定本柳田国男集 23 卷 15 頁）。

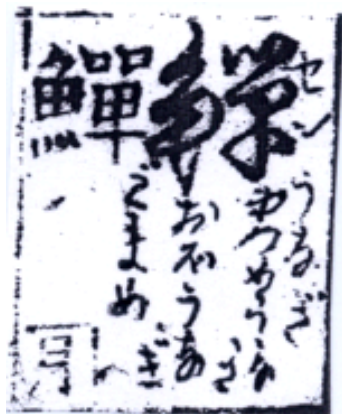


図2

たわいない話ですが、全国各地にゴマメ売りが行商していた、ということがわかります。

古代日本語「コメ」がゴマメに

ところで、ゴマメを漢字では「鯉」と書きます(図2)。中国では、古代から「黄質黒文似蛇」の魚と表現され、「学研新漢和大字典」では「ウナギに似たタウナギ」を意味します。日本では、「ウツボ」を指す漢字です。

では、なぜウナギ型「似蛇無鱗」魚が、「ゴマメ」の漢字として定着したのでしょうか。三つのことが絡まっているようです。

①日本で最も古い分類体漢和辞書「和名類聚鈔」(934年頃成立)の「韶陽魚」の項に和名「古米(コメ)」、また「鯉」の項に和名「衣比(エイ)」を示しました。

②同じく本草(医薬学)書「本草和名」(918年頃成立)の「鯉魚甲」の項に和名「古女(コメ)一名衣比(エイ)」を示しました。

③同じくイロハ順字書「伊呂波字類抄」(1200年頃成立)「古」に、「コマメ」「コメ」

として「韶陽魚」「鯉魚甲」を載せました。

つまり、中国で「似蛇無鱗」魚の「鯉」が、日本に流入してエイを指す漢字となり、別にエイを指す「韶陽魚」にもコメという和名が与えられ、その後、コマメが、これらの漢字の訓みとして定着したのです。

日本に漢字が流入したころは、魚へん漢字の意味する水生生物がどんな生きものがわからないまま、想像で記されることも多かったのです。そのほか、漢字を崩し字で書く場合もありましたから、写本づくりの際に、書き誤りもでて、それが後世に伝わります。

食文化史上の「ごまめ」という言葉には、エイを指す「こめ」という古い日本語が隠れていたのです。

——次回は「天に住む鬼？」の話です。ブログ版「MANA しんぶん」<http://manabook.cocolog-nifty.com/>にも記事の補注を載せましたのでご覧ください。

図1：絵本柳樽(国会図書館蔵)

図2：【倭玉真草字引大成】宝永4(1707)年刊(架蔵)